

野坂 十二樓（のさか・じゅうにろう）

1、プロフィール

野辺地の笹鳴会、菅菰会、手捏社（てづくねしゃ）などを興し、長くその指導的役割を果たし、河東碧梧桐の新傾向俳風を地元俳壇に定着させた。

<生没>

1878(明治 11)年1月 10 日 ~ 1961(昭和 36)年 11 月 22 日

<代表作>

『野坂十二樓俳句集』

<青森との関わり>

上北郡野辺地町に生まれる。県の一角から県内外に視野を広め、地元俳壇に日本派の新風を吹きこんだ。

2、作家解説

俳人。明治 11 年上北郡野辺地町に生まれる。本名重次郎。23 年野辺地小学校を卒業する。俳句修行を志し、32 年盛岡杜陵吟社、34 年大館、能代などを訪れる。

33 年山口鶯子・松内大隠らと結社笹鳴会を興し、次いで 36 年県下最初の活版印刷俳誌「菅菰」を創刊。能代俳誌「北星」の石井露月・島田五工や佐藤紅緑・木村横斜を選者にし県内外を視野においた。中央誌「ホトギス」にも投句していた彼は、「菅菰」でも力ある格調の作品をもって活躍する。同誌は5号で廃刊するが、大塚甲山を「東奥日報」俳壇の選者に推薦したり、県下俳句会を地元主催するなど活動力を示した。40 年1月河東碧梧桐が三千里行脚のため来野し滞在した際、十二樓はじめ野辺地俳人は、毎日のように俳句会を催し、後の新傾向俳句傾倒のきっかけをなした。

十二樓の39年から大正2年までの碧派専修は『続春夏秋冬』入集、「日本及び日本人」投句によく現れており、漢語調の強い格調・季語の稀薄化・視点の移動などの新傾向の特質をより深めた。

この間新傾向派内では種々の衝突があったが、その最大のものは荻原井泉水の「層雲」からの碧梧桐の脱退、それに次ぐ「海紅」創刊(大正4年3月)である。これと軌を一にするかのように、大正4年2月十二樓を発行人とし、山口漁壮、杉山三山、野村光網らを同人とする「手捏」(てづくね)が創刊された。県内各地からも参加、塩谷鶴平・兼崎地橙孫などを選者とした雑誌は、6年一時中断するが、10年9月30日で廃刊するまで続した。彼は終始「手捏」の中心の座にあった。その彼が9年の野辺地の大火に災いされ、東京の身寄りを頼り転居せざるをえなかった。11年青森の俳誌「善知鳥」は木村横斜・岩谷山梔子(くちなし)と共に彼を選者とした。昭和36年11月、83歳の長寿を保った十二樓は福岡県筑紫野市の長女田中睦子の宅に没した。

57年『野坂十二樓句集』が故郷野辺地で刊行された。

3、資料紹介

○『野坂十二樓句集』

図書

1982(昭和57)年初夏

175mm×115mm

昭和57年初夏発行で、編集兼発行人は山根恒次郎(上北郡野辺地町大月平27)。巻頭に横浜正大の序・工藤与志男の解説、長女睦子の文などがあり、巻末には略年譜、編集の後書きを載せる。句数393(全体を4期区分)、詩篇2を収める。